

Books of Falconry in Toyama City Library

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47022

鷹書文献序説

—富山市立図書館山田孝雄文庫蔵本の検討—

山本 一

はじめに

鷹狩に必要な技術・知識・作法の体系である鷹道の伝書を鷹書と呼び習わしているが、近世末期に至るまで多数の書物が編纂・書写されて来たにもかかわらず、文献学的な研究は近年まで盛んであったとは言えない。

宮内庁式部職が鷹道の総合的研究書として刊行した『放鷹』（一九三一年、吉川弘文堂より一九八三年復刊、同所より二〇一〇年新装版）に「鷹書解題」が収められ、長く鷹書研究の有益な道標となってきたが、この解題には詳細な書誌情報が含まれていないため、掲げられている具体の写本を特定することが難しいという問題点があった。その後の鷹書に関する研究としては、島田勇雄「放鷹諸流と鷹詞との関係についての試論—武家礼式における小笠原流諸派の放鷹書の基礎的研究—」（『神戸大学文学部紀要』第四号、一九七五年二月）などがあげられるが、研究の蓄積が進んだとまでは言えない状況であった。

しかし近年、秋吉正博『日本古代養鷹の研究』（思文閣出版、二〇〇四年）、「新修鷹経」の構成—「鷹賦」との関係—（八州学園紀要・創刊号、二〇〇五年）、「新修鷹経諺解」の翻刻と解題—（同上・第七号、二〇一一年）により、平安時代成立と目される『新修鷹経』の研究成果が示され、中世後期の鷹書については、二本松泰

子『中世鷹書の文化伝承』（三弥井書店、二〇一二年）が、いくつかの注目すべき鷹書を紹介した。二本松はその後も次々と資料の発掘と検討を続けている。また、大坪舞「鷹百首—たかやまに」類伝本考」（『古代中世文学論考』第二十九集、新典社、二〇一四年四月）、「近世における持明院家関連鷹書群の形成と伝来—『持明院家鷹十卷書』の考察を通じて—」（『古典遺産』六十二号、二〇一三年一月）などの特定の書目についての諸本研究も現れた。さらに近時、三保忠夫「鷹書の研究—宮内庁書陵部蔵本を中心に—」（和泉書院、二〇一六年）が、宮内庁書陵部蔵鷹書の悉皆調査を基盤に、関連する資料をも博搜して刊行された。このように、近代的な文献研究の手法による鷹書研究が急速に進展しつつあるのが現段階であると言えよう。

特に右記の三保著書は、膨大な量の写本を調査して詳細な書誌情報を明らかにするとともに、奥書などによって判明する人物名を指標に分類し、またそれらの人物に関する詳しい考証も加えている点で、将来の研究の基盤となるべきものと言えよう。そもそも鷹書には、たとえば「鷹之書」などの普通名詞的な書名を持つものが多く、混同を避けるためにはまず個々の写本を特定し、その上で、相互の関連性を検討して、同一の書目（作品）に帰属する伝本群を確定していく必要がある。また、鷹書の伝来においては、抜粋や編纂・集成、一部改編などのさまざまな操作が生じていると見られ、どの程

度の数の鷹書が基本的な書目として存在したのが明らかになるには、さらに研究の蓄積を待つ必要がある。従って、三保著書により、個々の写本の特定を完全に可能にする書誌情報が提供され、人物名という指標による暫定的な分類（現段階では伝承的な人物と、具体の編纂・書写に関与した人物とがしばしば弁別できないのはやむを得ない）が示されたことの意義は、きわめて大きいと言える。

さて稿者は、『鷹百首』などの鷹歌の文献資料への関心を糸口に、戦国期から近世初期の鷹書の流布状況を示すいくつかの資料に注目してきたが、なお断片的な検討の域を出ていない。したがって上記の先学の研究に付け加えるべきことは多くないのであるが、調査し得た文献にいささか興味を引くものがあつたので、鷹書研究の蓄積を多少なりとも増益する意味で、若干の報告を行っておきたい。

1 富山市立図書館山田孝雄文庫蔵の鷹書について

国語学者として著名な山田孝雄の蔵書が富山市立図書館に「山田孝雄文庫」として保管されている。その中に数点の鷹狩関係の書物が含まれる。まず、現在調査し得た範囲で、各書目について概観する。なお、目録番号・分類番号・寸法は富山市立図書館編『山田孝雄文庫目録 和装本の部』（二〇〇七年）による。「整理書名」は同目録の見出し書名である。また、書写年代については、同目録の記載を「目録」として注記する場合がある。

①目録番号 3935 分類番号 W787.6-4-5296

整理書名「宇都宮流鷹書」。23・0×16・6。仮綴（袋綴）。本文共紙の表紙左寄りにウチツケで「宇都宮流鷹書」と墨書。遊紙一丁、目録（墨付一丁オ〜五丁オ）の後に五丁ウを空白とし、六丁オより本文。目録は一面七行、本文は一面八行。漢字平仮名一部片仮名書き。

叙述形式は一つ書きで、見出しは立てない。本文冒頭に内題の体裁で「梧桐下巻」、墨付十五丁裏に「梧桐二云」の文字がある。奥書は、最終丁にあり。

宇都宮流鷹一部之抜書

大宮新蔵人

宗勝

天正九年弥生下游敬白

在判

重宗様

とある。書写は近世中期以降と見られる。内容の問題点については後述する。

②目録番号 3936。分類番号 W787.6-4-5106

整理書名「御狩の記」。近世成立の、鷹に関する故実の考証である。

③目録番号 3937。分類番号 W787.6-4-3736

整理書名「諸国鷹出所地名集」。折本一帖。各国の鷹の産地を列挙する。書写は近世後期と見られる。

④目録番号 3938。分類番号 W787.6-4-5079

整理書名「鷹方四仏巻秘伝聞書」。17・7×12・6。藍色無地表紙袋綴一冊。一丁オに内題「鷹方四仏巻秘伝聞書」。ただし、これは全冊の題ではなく、後述するように巻の表題である。本文一面九行。漢字平仮名混じり。最終丁は裏表紙に貼られており、奥書等はなく、本文末尾に欠脱の可能性がある。書写は近世中期と見られる。次の六箇所に、内題のようなものが認められる。

鷹方取飼巻秘伝聞書 一丁オ

鷹方取飼巻秘伝聞書 ∞丁オ

鷹方法儀巻秘伝聞書 20丁オ

鷹方秘伝聞書見分見定之巻之内 21丁オ

鷹方餌飼巻秘伝聞書 41丁オ

追加鷹方秘伝聞書 106丁オ

これらの内題を持ついくつかの巻(冊)からなる鷹書から、転写を経たものと推測されるが、現時点では詳細を確認し得ない。

⑤目録番号3939。分類番号W787.6-4-3209

整理書名「鷹十二架」。24・0×18・2。青地に金泥、切り箔、砂子で雲霞と海辺の景および野の草花を描いた表紙。列帖装一冊。本文料紙は鳥の子か。墨付丁数は六丁。第一括四丁は架に鷹を繋ぐ緒の結び方の図。第二括三丁は尾の斑の図。「鷹十二架」は前半部分の表題である。奥書は、

天正十四年丙戌

九月吉日廣田伊賀守藤原宗綱

増田中務吉備殿

書写は、目録には「江戸中期写」とある。十七世紀後半頃の書写かと思われる。価値の高い書物の作成を目指したと思われる美本である。

奥書の宗綱は伊達藩の人物で、鷹道・鷹書の関係については、この写本を含めて、二本松泰子「鷹書から見た中世の諏訪―廣田宗綱写『才覚之巻』記載の諏訪の言説を端緒として―」(福田晃・徳田和夫・二本松康宏編『諏訪信仰の中世―神話・伝承・歴史―』三弥井書店、二〇一五年)に論じられている。

⑥目録番号3940。分類番号W787.6-4-3232

整理書名「鷹符替書」。21・3×14・9。紙縫による仮綴じ(袋綴じ)一冊。本文共紙の表紙にウチツケで「鷹符替書 全」と墨書。内題

「鷹符替次第大形」。一面八行和歌二行書、墨付丁数全十二丁。鷹の毛色を二十九項にわたって「やまひめに」類の鷹歌を引きながら解説する。奥書等なし。目録は「近代写」とする。平仮名漢字交じりの流麗な草書で写されている。

⑦目録番号3941。分類番号W787.6-4-5315

整理書名は「鷹療治書」(仮題)。18・4×15・8の枳形薄茶表紙袋綴一冊。表紙右寄りに外題と見られる「葉(以下不明)」のウチツケ墨書があるが、刷り消されたようであり、判読できない。見返しが遊離したかと思える前一丁に、本文に関連する注記のような文言が記される。奥書は、

大宮新九郎 氏家判

氏家卜心齋 直武判

富澤兵部少将

永祿二年巳未菊月中旬書之

書写年代は一七世紀後半頃かと思われる。主な内容は整理書名が示すように鷹の病の対処法であるが、冒頭には、聖徳太子・宇都宮明神と鷹書の伝来に関する、神話的伝承が記される。奥書の人物は未確認であるが、「大宮新九郎氏家」については三保前掲書六〇五頁に「鷹之符集 明神流」(書陵部蔵の松江藩旧蔵書に含まれるもの)の奥書に見えることが示されている。

以上の書物が、どのような経緯で山田孝雄の蔵書になったかは未確認であるが、①と⑦が宇津宮流鷹道や宇都宮明神と関係を持つ点には注意される。ただし、二点の写本の間には、書誌的な共通性や内容の密接な関係は確認できない。以下では、このうち主に①について、気のついた点を報告しておきたい。

2 山田孝雄文庫本「宇都宮流鷹書」の意義

以下では、前節で示した①の写本について、検討したい。本書（以下、便宜上「山田文庫本」と略記する）は、前掲『放鷹』の「鷹書解題」四九四頁に「宇都宮流鷹書 一」として掲げるものと、外題、内容要目、奥書が一致し、同一書目と推定できる。すなわち、『放鷹』当該項目の説明は、

かれ木（指肉落の事）、爪抜の事、爪くちき、いきげの事、蓬菜散こしらへやう、以下すべて六十五條。梧桐下巻とし宇都宮流一部の抜書にて、大宮新藏人宗勝、天正九年弥生下瀬重宗様とあり。

というのが全文であるが、山田文庫本の内題および奥書は先に挙げたとおりで、右の『放鷹』の記事後半に述べる所に一致する。また、山田文庫本の目録の冒頭一面分は

一 かれ木 ゆびの肉落之事（山本注。「ゆび」は本行の「爪」を墨で塗り消して傍記）

一 爪ぬけの事

一 爪くちき

一 いきげの事 はやいきの事（山本注。濁点は原本にあり）

「は」に「火イ」と傍記し、さらに「イ」にミセケチ点を付す）

一 蓬菜散こしらへ様

一 蓬菜散かいやう

一 舞くせの鷹之事

とあり、前掲『放鷹』の記事に重なる。ただし、山田文庫本の目録は一面七行でちょうど九面分六十四条と数えられるが、一箇所（墨付一丁ウ四行目）「一」を行の途中に置き、二条を一行に記したと見られる箇所がある。目録の箇条と本文の箇条とは、対応が不明確な場合があるので、この箇所を二条と見るべきかどうかは断言し

がたいが、『放鷹』が目録によって条の数を数えたものとするれば、六十五条とした理由はこの箇所に関係するかもしれない。かれこれを勘案して、『放鷹』が参照した本と山田文庫本は、同一書目であると思われる。そこから進んで、両者が同一写本であったかどうかであるが、『放鷹』に掲出された書目の多くが、当時宮内庁に所蔵されていたと見られる一方、宮内庁書陵部藏鷹書の悉皆調査に基づく三保前掲書第二章第九節（五九二頁）によれば、『放鷹』に掲出するこの書目に該当する写本は確認されていない。仮に、もともと書陵部にはこの写本がなかったとすれば、かつて『放鷹』が参照した写本が、山田文庫本そのものであった可能性もある。ただし、「はじめに」に述べたように、『放鷹』の解題は書誌を記さず（調査時点での所蔵者や、それまでの伝来についても記さない場合が多い）、参照された個別の資料の同一性認定が困難である。したがって、山田文庫本以外の写本が参照された可能性も否定はできない。とりあえずは、『放鷹』掲出の書目の、伝本の存在が確認されたことを報告しておきたい。

本書奥書の「大宮新藏人宗勝」については、前掲三保著書に、同人に関連があると思われる鷹書伝本が示されている。奥書等に宗勝の名前の見える鷹書は、本書同様に内外題または奥書などで宇都宮（宇津宮とも表記される）流との関係を示すものが多く、鷹道の流派である宇都宮流の伝来に役割を果たした人物であると推測できる。宗勝については、二本松前掲論文も、山本の山田文庫本に関する口頭発表も踏まえて、「宇都宮流」を書名に持つ鷹書にしばしば現れる人名であることを指摘している。ところで、従来、鷹道の伝来についての資料として用いられ、『放鷹』の記述においても参照された『柳庵隨筆』の記事に依れば、諏訪の贅鷹を管轄していた欄津流の人々が「神平」の姓を名乗ったこと、「神平宗光」が「大宮新藏人」を名乗り、この代に公家方に伝わっていた鷹道の伝承を統

合したこと、などが記されている。『放鷹』は、おそらくこの記述を踏まえ、「大宮流」という流派の創始者を「大宮新藏人宗光」とし、『啓蒙集』をこの流派の伝書であると解説している（『放鷹』本邦放鷹史・第一編二十一「鷹の流派その二」）。『啓蒙集』は、宮内庁書陵部、国立公文書館内閣文庫等に複数の写本が伝存する。現存形態（巻数）は多様であるが、七巻以上のかなり体系的・網羅的な鷹道の書物と見られ、その跋文に「大宮新藏人」への言及が見えるものである。この、伝承的人物とも言える「大宮新藏人宗光」と、宇都宮流に関係のあると推認される「大宮新藏人宗勝」との間には、その呼び名から何らかの系譜関係を考えるのが自然であるが、両人物ともいまのところ他資料から確認されておらず、詳細は不明である。三保前掲書は、『柳庵随筆』の記載に依拠して、「大宮新藏人宗光」の節を立て（同書第二部第二章八節）、『啓蒙集』の伝本をこの節で網羅的に紹介しているが、「多くは今後の検討を俟ちたい」として、位置づけについては保留している（五七四頁）。二本松前掲論文は、『柳庵随筆』と『放鷹』の記述そのものも、再検討の必要があることを論じている。このように宗光および宗勝については、未解明の部分が多いが、『啓蒙集』に関わる問題については4で再度触れたい。

なお、奥書に記されたもう一人の人物「重宗様」について、三保前掲書は、伊達家に仕えた巨理重宗ではないかとする。伊達家と鷹書の伝来の関係については、前節に⑤として示した資料や、前掲二本松論文にも示されるとおりであるが、宇都宮流の名の由来である宇都宮社の地理的位置が、奥州へ北上する交通路の要であることも注目される。さらに関連資料に注意していく必要があると思われる。次節では、この本の記事内容をめぐって、類似の記事を持つ資料との比較を交えて、もう少し詳しく検討したい。

3 山田文庫本「宇都宮流鷹書」と国立公文書館内閣文庫蔵「鷹相

之巻抜書」

本書の主要な内容は、鷹の疾病や負傷に対する対処法、すなわち鷹の医療に関するものである。

一般に、医療的知識は鷹道において非常に重視されたようであり、これらに関する知識のみを記した規模の小さい鷹書が多く伝来する一方、大部の体系的な鷹書であれ、断片的な抜き書きの鷹書であれ、医療的簡条を全く含まないものは少ない。治療の方法は、薬（内服および外用）、灸、呪文等に分かれ、薬の処方にも用いられる素材は、人参・甘草など和漢の薬種として知られるものから、民間療法的・呪術的なものまで幅広い。同様の症状に多くの対処法が列挙される場合もあり、一部が秘伝として特別視される場合も見られる。近代科学の観点からは疑わしいものが多く含まれるが、近世以前においてこれらの知識が真剣に扱われたことを疑うべきではない。

さて、山田文庫本「宇都宮流鷹書」の場合は、ほぼその内容は症状に対する薬による対処法である。まず、できるだけ原表記を活かしつつ本文冒頭を示す。

A（山田文庫本「宇都宮流鷹書」）

一鷹の足にかれ木と云煩出て

あしをやしなふ血なくしてをの

つからひるなり養性には

黄檗一匁甘草二分白朮三分煎

其汁をてんがいの粉にひたし

かれ木二可付此煎薬を内薬にも

かふなり煩は大事そうにて

即可治

一かれ木を治しての後色なをり

かたき時は山梔子をせんにして

可付又さしはのあしをかる時にも
右之養生なり

一しよ鷹とも二爪をぬく事ちつき

して甘草を煎て杵のやにを

ねりあわせ爪をさし可入よく

あた、めて一にて脂にゆい付て可

置何と物をととてもいたむ事なし

ところで、国立公文書館内閣文庫に蔵する鷹書を調査した際、類似の文言を持つ資料が判明した。分類番号(函号)一五四・二七八、帙外題「鷹相之巻拔書」とする本であるが、書誌などの詳細は後に述べるとして、この本の本文の途中(墨付十六丁ウから)を引く。

B (国立公文書館内閣文庫蔵「鷹相之巻拔書」)

一第卅二枯木トテ足ヲやしなふ無血シテおの

つからひるなり薬には一わうへき老奴

一甘草二分一白述三分煎シテしるをそはノ

粉にひたして枯木ニ可付此煎薬を

内薬ニモ飼也煩は大事そうニテはやく

きく足能成て後色をなをす薬には

くちなしを煎シテ可飼

一第卅三諸鷹共ニ爪ヲ拔事有其爪アル

則一甘草ヲ煎シテ杵ノやにヲねはしテ

爪ノしんにぬるへし扱狎あた、めて

爪ヲ指へしから系にて爪ヲゆびにゆい付

て置也若又爪失セル則右之薬ヲ爪の

しんニまきておくなり頓而爪出来候也

本全体の中での右の記事の配列位置は両本で異なり、右の引用箇所においても、それぞれ独自の記事があって、同一本文とは言えないが、それでも、多くの箇所においては叙述の順序の一致が認められ

る。表記や語彙が相違するにもかかわらず、いわゆる「対校可能」の状態が見られる。たとえば、A五行目「てんがいの粉」(濁点は底本にあり)は少し解しがたいが、B「そは」とあるから見ると蕎麦粉の意であり、「てんがいの粉」は蕎麦などを挽く石臼の意の語であるかと推定できる。A十二行目「しよ鷹」はBにより「諸鷹」と判明するし、同じ行の「ちつき」「き」を傍点ミセケチにする)も難解であるが、Bを参照すると、抜けた爪であり、「血付」ではないかと推測される。A十五行目「脂」は「指」の誤写、B十行目「狎」の訓は「ねんごろに」かと推測できる。説話集研究などで使う「同文関係」という言い方が当てはまる。そこで、この二つの本の関係をもう少し検討したいが、その前に、あらためて当該の国立公文書館内閣文庫蔵写本の書誌を示す。

○国立公文書館内閣文庫蔵「鷹相之巻拔書」(一五四・二七八)

23・6×17・5 藍色無地表紙枳形袋綴じ一冊。帙入りで、帙外題は短冊題簽に「鷹相之巻拔書」。外題は、表紙左上に短冊題簽で「大宮流鷹書」(題簽の字は本文とは別筆)。見返しは金銀砂子切箔散らし。本文は一面八行。墨付き一丁表に「目録之次第」と表題し、以下に四丁裏まで目録六十一項目(番号は六十四まで)。五丁表に「鷹相之巻拔書」と内題。所々に朱点あり。

奥書は以下の通り。

以上

右之一冊大宮新藏人極意

不殘令書写者也委細鏡野

抄ニ餘任之畢

以上 六十一ヶ條也

元和七年

平井似仁齋

十月吉日

如犬

相虎輔殿

書写年代は、奥書に示す元和七年と見なすことが可能と思われる。表紙および外題は、近世初期をあまり降らない時点の後補と考えられる。

この本（以下、内閣文庫本「鷹相之巻拔書」と略称）は、三保前掲書に、「宇都宮流鷹書」とともに「大宮新藏人宗勝」に関係のある資料として、既に掲出されている（五九六頁）。並んで掲出された東京大学附属図書館蔵「鷹書拔書」は（稿者は未見であるが、三保前掲書が示す目録から見ると）、内閣文庫「鷹相之巻拔書」と近い内容を持つようである。そこから類推すると、内閣文庫本の奥書には「大宮新藏人」としか記さないが、これは東京大学附属図書館蔵「鷹書拔書」の奥書や、山田文庫の奥書にある、「宗勝」と見てよいのかもしれない。

以上を踏まえ、山田文庫本「宇都宮流鷹書」と内閣文庫本「鷹相之巻拔書」との対応関係を、もう少し詳しく見ておこう。

4 両書の関係

内閣文庫本「鷹相之巻拔書」（この内題書名にも若干の問題があるが、それについては後述する）は、冒頭に「目録の次第」として「一第一」から「一々六十四」までの箇条を示す。ただし、最後の三条は番号のみで表題を記さない。本文部分では、各料条に表題を再掲せず、「一第一」などの番号のみを記す。本文と目録との関係に不審のある場合もあるが、通し番号があることは考察に便宜なので、以下、これを用いて論述する。

先に示したように、山田文庫本の冒頭本文は、内閣文庫本「鷹相之巻拔書」の三十二条・三十三条に該当する（山田文庫本では箇条は三つになっている）。調べてみると、以下三十九条まで、両書の

記事配列におよその対応が見られる。

山田文庫本を基準に下段に置き、目録標題の関係を示してみると、

三十四条「つまくじきの事」 ↑ 「爪くちき」
五十二条「息氣の事」 ↑ 「いきげの事」

三十五条「蓬萊散のこしらへ様之事」 ↑ 「蓬萊散のこしらへ」

三十七条「蓬萊散の飼様之事」 ↑ 「蓬萊散かいやう」（本文欠）

（三十五条記事後半にあり） ↑ 「舞くせの鷹之事」

三十六条「つまり氣の下シ之事」 ↑ 「つまり鷹之事」

三十八条「くみ葉之事」 ↑ 「くみ葉の事」

（山田本文欠） ↑ 「脈の次第」

三十九条「乱氣とて筒病知る事」 ↑ 「たう病一葉之事」

一見、不十分な対応しか認められないようであるが、三十五条は両本とも本文が欠落しており、ために内閣文庫本「鷹相之巻拔書」の本文では「つまり氣の下シ之事」が三十七条となり、この部分の実態は山田本と同じ配列になる。また、三十八条「くみ葉之事」の後に、山田文庫本目録は「脈の次第」を置き、これに対応する箇条が内閣文庫本「鷹相之巻拔書」に欠落するが如くであるが、実際は山田文庫本にこれに相当する本文が欠けているため、本文での両書の隔たりは小さい。結局、内閣文庫本「鷹相之巻拔書」の五十二条が全く異なる位置にあるほかは、ほぼ両書の箇条配列は対応することになる。

また、山田文庫本の本文の途中に「梧桐に云」という内題風のものがあり、その次から、鷹の体幹の病として重要視される「胸氣」（発音は「ドーゲ」か。漢字表記は種々ある）の条が来るが、これは内閣文庫本の冒頭第一条に対応し、以下先ほど本文を引用した箇所の直前の三十一条までは、両者の記事配列はほぼ一致している。これらの箇所にも、同文的な記事が認められるので、一部を例示する。

A

一鷹毛のうちいたうけといふは
 糸をむさぶりくらはすうちの色
 あかきも有青も有又うちたけ
 ちかしうちもちやはらかにして

一方により候又筈脈ちかい又おし
 てみるにつよきとよわき事

有へし又鷹のまなしりに目より

あるへし右之ごとく成鷹をはたう

けと心得て薬を可与 人參二分

けんごうし一分防風三分赤芍薬二分

何も粉にして・是ほとに丸て餌に

包大鷹に三粒せうに二はいたかには一

則うち長のびて糸をもよくくふ也

B

一第一筒気の有る鷹は先餌をむさ

ぶりくらはすうちの色赤も有又

青も有又うちたけちかしうちもち

やわらかにして一方へ寄事候之也

又云はづ脈ちがひくわす候又つよきよ

はきあり又鷹の眼尻に目よりゐたり

此如の則筒気とおもひ薬を飼可候

一人參二分一けんごし巻分一防風三分一芍薬二分

何も粉にして・是程に丸め餌皮に包三朝

飼なり則うちたけのひて又餌もくふ也

Aの冒頭に「毛」とあるのは、「病」などの誤写かと思われる。双方の二行目に見える「うち」は、鷹詞で鷹の排泄物を指す（ウチの色や頻度、流れ方などで疾病を判断するため、鷹書によってはウチの流れ方を多色で図示する）。脈や目の状態からの診断も人間の医

療と共通する（目の図示を行う鷹書もある）。「是」とした箇所は、実際に黒い丸印が書かれている。黒丸の大きさが実際の丸薬作成の尺度となったものと見られるが、現存の写本が親本の丸印の大きさを忠実に転写しているかどうかは何とも言えない。

以上のような状況から見ると、両書には、通常の伝本論的な意味での転写関係は存在しないが、なんらかの関係はあると考えられようである。もちろん一般論として言えば、鷹の疾病やその対策は、鷹の飼育においてはきわめて実践的・具体的な知識なので、直接の参照関係のない書物においても、内容や叙述のしかたが一致することはあり得ると考えられ、安易に内容の対応から書物どうしの関係を導くことはできない。しかし、ここで問題にしている両書の間には、箇条の配列にもある程度の対応が認められる。箇条の配列には、一目でわかるような明確な合理性があるわけではなく、偶然の一致がいくつも起こることは難しい。しかも、先に見た三十八条の例のように、本来は転写過程での何らかの錯雑と見られるものすら、両書間である種の対応を示している場合がある。総合的に見て、両書の間への何らかの関連性は否定しがたいと思われる。

両書の奥書を見ると、山田文庫本には「宇都宮流鷹一部之拔書」とあって、より大部の宇都宮流伝書から抜き書きした本であることが示唆される。また、内閣文庫本「鷹相之巻拔書」は、内題書名じたいが「拔書」であり、また奥書には「委細鏡野抄二餘任之畢」とあって、「鏡野抄」と呼ばれる書物からの抜き書きと称している。「鏡野」の名は、説話伝承をともなう鷹詞として多くの鷹書に記される「野守の鏡」（平安時代から歌語としても流通する）にちなむものである。鷹書には「拔書」と称するものがきわめて多く、それらがすべて称するのとりの「拔書」なのかも不明である（背後に大部の書物を暗示する権威づけの手法が含まれていないとは断言できない）。ただ、ここで問題にした二つの書物のような、不即不離の微妙な対

応は、背景に同じ根幹的な書物を想定することで理解しやすくなることも確かである。

もともと、鷹の疾病の対処法のような実践的な知識の書承の場合は、たとえば權威ある歌書を書写する場合などとはことなり、親本の本文の忠実な転写が求められることはないであろう。必要と関心に応じた書写による本文の変化に、通常の誤写や、錯簡などの物理的事情による順序のまじり入れ替わりなどが加われれば、両書の現状のような差異は発生し得るのである。ただ、両書の直接の「親本」が「鏡野抄」であり、それが「宇都宮流一部」の鷹書と同じ書物であるとまでは、単純化できない。さしあたりは、関連性を持つ書物群の中の、二つの個体として捉えておくほかに思われる。

5 残された問題

今後に検討されるべき問題が多いが、気のついたものを列挙しておきたい。

①内閣文庫蔵「鷹相之巻抜書」の外題および所属流派、「啓蒙集」との関係

まず、外題に「大宮流鷹書」とある点についてであるが、この外題と本文は筆跡が異なる。金銀の砂子切箔を散らした豪華な表紙が後補された際、またはそれ以降に書き加えられたものであり、奥書に「大宮新藏人」とあるのに依って「大宮流」の伝書と判断した後人の所為であろう。したがって、本書の本来の性格を考える上では考慮に入れなくてよいのであるが、それならば山田文庫本に近いから「宇都宮流」伝書だと定めてよいのかというと、それには慎重さが求められる。そもそも、伝書と流派（人間集団）とは密接な関係

があり、前者のアイデンティティを担保するところに伝書の存在意義があるというのは、一般論として妥当であろう。しかし、鷹道の場合、「流派」が何時どのようにして形成されたか、各流派は当初から伝書をともなっていたのか、伝書の実際の内容はどの程度流派により異なるのか、といった基本的な点が、なお十分明確ではない。本稿に関係する点に限っても、「大宮流」「宇都宮流」それぞれの形成過程について、不明な点が多いのである。もちろん、遅くとも内閣文庫蔵「鷹相之巻抜書」の外題が書かれた時点では、「大宮流」という流派が認知されていたことは当然で、大宮流がある時期から歴史的に実体を持っていたことは間違いない。

『放鷹』は、前述のように、大宮流を大宮新藏人宗光に始まる流派と解し、その伝書を『啓蒙集』であると捉えている。この書物については、二本松前掲書、同前掲論文、三保前掲書にそれぞれ触れるところがある。『放鷹』以来、その巻数に異同が多いことが問題とされているが、「啓蒙集」という名称は鷹書としては比較的固有名詞的な書名であり、この名で呼ばれる書物群を統括していることが予測される。稿者自身の調査が行き届かない段階での憶測ではあるが、巻の数の違いにもかかわらず、諸本の内容には対応関係があると予想してもよさそうである。たとえば、稿者が調査した国立公文書館内閣文庫蔵七冊本『啓蒙集』（一五・四・三二〇）は、外題（題簽）を「鷹啓蒙集 一（一七）」とするが後補であり、各冊本文冒頭の内題は、

啓蒙集一

啓蒙集二 法儀

啓蒙集三

啓蒙集四 捉飼

啓蒙集五 葉方

啓蒙集六 葉方

啓蒙集七 秘伝

となつてゐる。第一冊は内題に表題がないが、目録に「一 四佛之事」以下の十二項目を掲げ、鷹道に関して伝承される故事来歴が中心である。第二冊は鷹狩に関する作法、第三冊は鷹の分類や身体部位の名称、第四冊は鷹の飼育法、第五冊・第六冊は疾病の対処法、第七冊は特記されるべき秘事をまとめたものと解される。網羅的とまでは言えないにしても、鷹道に関する知識を体系的に集めた組織となつてゐる。これに対して、同じく内閣文庫蔵の四冊本(特九四・九)は、ラベルの整理順で内題を示せば、

(第一冊) 啓蒙集□「虫損」葉方

(第二冊) 啓蒙集五 葉方

(第三冊) 啓蒙□「虫損」

(第四冊) 啓蒙集 抜書

となつてゐる。目録や本文の比較から、四冊本第一冊は七冊本六に、四冊本第二冊は七冊本五に、四冊本第三冊は七冊本二に、それぞれ内容が一致する。第四冊「抜書」は鷹の薬に関する記事で、この巻のみ片仮名漢字交じりである。四冊本は近世初期の書写と見られるが、七冊本(一七世紀後半写か)よりやや書写が古いように見える。現状から見ても、四冊本(特九四・九)は、本来、七冊と抜書一冊の八巻本としていったん成立したもの(すなわち現存形態は残欠)と見てよいであろう。七冊本(一五四・三一〇)は、この「八巻本」の直接の転写本かどうかは現時点では断定できないが、同一の内容の「八巻本」の副本として作成されたものであろう。現存形態では抜書一卷を欠いているが、副本作成の時点で、抜書は別格として書写されなかつた可能性もあろう。

この「抜書」の性質についてはなお精査が必要であるが、その奥書に、

右此抜書我朝夕有覚所記之者也

可秘々々

とあるのが、以下に述べるような点から注意される。この奥書は最終丁の最終行で終わっており、最後の行は、列帖装の喉の綴じ目の一部が入り込んでゐる。すなわち、これ以後の部分が失われている可能性が感じられるのであるが、はたして、この「抜書」の近世中期以降の写本である、国立公文書館内閣文庫蔵本(一五四・三八九、外題は「啓蒙集 全」)であるが、内題は「啓蒙集 抜書」で、こちらが内容に添つてゐる)には、次の奥書が写されてゐる。

右此抜書我朝夕有覚所記之者也

可秘々々

承応三

甲午正月日

山本藤右衛門

同 藤右衛門

前木 賀助

土田四郎右衛門

この奥書は、四冊本(特九四・九)「抜書」に本来存した可能性がある。山本藤右衛門盛近(一六六五)は、多くの鷹書に関わつた鷹匠として、二本松前掲書、三保前掲書(特に第二章第六節)で注目されている。二本松前掲書に翻刻された宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』(七冊本の「一」にあたる一冊)にも、承応三年正月の盛近の奥書と花押がある。これらを勘案するに、承応三年(一六五四)の頃、盛近は「抜書」を含む揃い本で『啓蒙集』を書写し、その後、引き続いて(流派内外での副本作成の需要に応じて)、次々に写本が作られたのであろうと考えられる。多数伝来する写本の状況にはいまだ不明の点もあるが、おそらくは七冊に「抜書」を加えた八巻本が『啓蒙集』の基本の形であり、十冊本は(三保前掲書の詳細な報告を参考に推測すれば)、七巻本のうちの分量の多い巻を適宜分冊したものであろう。冊数という外形的な部分の多様性が目立つが、本来の

内容は必ずしも流動しなかったのではないかと推測できる。

さて、『啓蒙集』の成立については、「七 秘伝」の奥に記された跋文風の文章がいちおうの手がかりとなる。上記内閣文庫蔵七冊本により、試みに句読点を補って示す（「」内は原本の振仮名、濁点は現本に存するもの）。

大宮新蔵人鷹学のをしへ、あまねく古きをたつね、あたらしきをきはめて、理をつくし法をそなへ侍れば、我智のつたなきを以、あらためた、すへきにはあらねと、桑歳「サウサイ」より諸流を閲「ケミ」して、力を此道にゆたねぬるあまりにて、しばらくしけきをかり、たらざるを、きのひ、みつから心に得、手になれし事を、かきあつめて、けいもうしうとなつて侍る。すこぶる童子のこの理にくらきものを、ひらきみちひく便にもあらんかし。

これによれば、この集の編纂者は、若年よりさまざまな流派を学び、鷹道に精進してきたので、その知識と経験をもとに、「大宮新蔵人」の教えの煩雑なところを整理し、不足を補い、自分の理解した知識と実践で習得した技術を集成・編纂したとする。冒頭に「大宮新蔵人鷹学の教へ、遍く古きを尋ね、新しきを究めて、理を尽くし法を備へ侍れば、我が智の拙きを以て、改め正すべきにはあらねど」（一意により校訂）と、いちおう大宮蔵人の説の完璧さを称えつつも、「あらねど」と逆接で続く後半では、自らの見識で編纂したことを主張している。謙遜を旨とするこの種の文章の常套から見れば、編纂者の自負はかなりのものと言えよう。この跋文を信じるならば、この書について「大宮新蔵人の輯むるところ」とする『放鷹』解題の説は、従えない。

この跋文には署名がなく、編纂者は特定できない。早い段階での書写者である山本盛近は、当然候補となろうが、編纂者とするには裏付けがない。現時点では、十七世紀半ば以前に、「大宮新蔵人」

の説を基礎に、他流派から得た知識や編纂者の新見も加えて作られた書物であろうと言うことしかできない。『啓蒙集』は、「大宮流」の伝書であるとされるが、その内容と、それ以前の（「大宮流」という呼称の根拠と見られる）「大宮新蔵人の教え」との関係も、直接には見通せないことになる。

この問題は今のところこれ以上に展開することができないが、参考までに、本稿が見てきた山田文庫本「宇都宮流鷹書」と内閣文庫本「鷹相之巻拔書」の記事の重なり部分と、『啓蒙集』の記事との関連性を見ておこう。本稿3で引用した「かれ木」と称する疾患についての記事に該当するものは、『啓蒙集』第五冊の「六」の項目に見える（「六」の下に記された標題は漢字一字。再現困難であるが、病垂に「口」「比」「足」を縦に並べた旁。訓は「あしかれ」と考えられる）。句読点を補って示す。

鷹あしかれといふ病、寒の病也。鷹の腎のそのの病也。筋に血なくして引弦、あしにほとをりなし。足の皮ひつき、色あか黒し。死足に似たり。此病を枯木共いふ也。（以下略）

一名として「枯木」が挙げられていることが、病因についての基本的認識の重なりとともに注意される。また、治療法については「茴香金星湯」ほか三種の処方を示すが、うち「黄檗白朮湯」は、

黄檗、白朮、二味せんして、蕎麦の粉をねりて飼也。又足にも付ル。

とあるように、「宇都宮流鷹書」「鷹相之巻拔書」が記すものと同一の処方である。また両書に記す山梔子についても、三種の処方のほかに「又」として列挙する中で「山梔子をせんして足にしけく付ル」と見えている。言説の構成は異なるが、内容となる知識についての重なりが認められる。本稿4に示した「胸気」については、第六冊に「五 胸気」という項目があり、重要視された疾患だけに約十二面に及ぶ多くの記事があるが、その中の症状に関する記述には、

餌を饜りむなえはむ。目尻少白色となる。眼本に垢あり。うち色あかきもあり青きもあり。羶長近し。うちもちやはらかにして、かたよることあり。筈は反してあわす。噫し或のびをする也。

との箇所があり、処方の冒頭には「芍薬散」として、

人參 垢芍薬各大 牽牛子(中カワ去、あぶる)

細末し、てのりにて丸餌に包、七五三に飼へし。うち長のひて、餌をよく食也。

がある(一)内は割注)。先にも述べたように、このような実践的な知識の場合、書物が異なっても内容にある程度の符合があることはむしろ当然とも考えられ、このことのみから書物の相互関係を論じることは早計である。ただし、『啓蒙集』が多くの知識を集成している中に、「大宮新藏人宗勝」の教えと称する他の文献との一致部分が検出できることは、いちおう注意されると思われるので、今後の検討の糸口のひとつとして示しておきたい。

②内閣文庫本「鷹相之巻拔書」内題と「梧桐」について

山田文庫本「宇都宮流鷹書」に、内題とも書名とも見える「梧桐」の文字が二箇所に見える。内閣文庫本「鷹相之巻拔書」にはこの文言は見えないのであるが、実は、この内閣文庫本の内題にいささか問題がある。鷹の外形や部位について主に記す鷹書は珍しくなく、それらについて「鷹相」の書名が与えられることに違和感はない。しかし、本書はほぼ鷹の病に関する記述で成り立ち、「鷹相」という語はあまりふさわしくない。そのような不審を持って内題の字形を見ると、「相」の字の傍の下部の画が略されており、「桐」とは読めないまでも、「桐」と書かれた親本からの転写を疑わせる点がある。一方、『放鷹』や『保前掲書第二部第二章第九節』から知られるように、大宮新藏人宗勝の関与や「宇都宮明神流」を名乗る伝書で、近世に

書写されたものには、「霧之巻」の内題や外題を持つものが少なくない(「きり」と仮名書きにするものもある)。秘伝的な伝書に謎のような書名や副書名(例えば歌道における兎鷹系偽書の場合が想起される)が付せられることは珍しくなく、また漢字表記に必ずしも絶対性や規則性がないことも、近世以前の文献では当然である。憶測ではあるが、「梧桐」すなわち「きり」を名乗る伝書が、鷹道のいずれかの流派に存在したか、もしくは存在するらしく伝えられていた可能性を指摘しておきたい。

その他、内閣文庫本「鷹相之巻拔書」の文中(墨付六丁表)に引用される書名「神のふもんとう」「神の文・問答」か)など、問題にするべき点は多々あるが、本稿では展開する準備がない。

既に書写伝来の中である程度淘汰され、依拠するべき正典的な写本が特定されているような文献(例えば著名な文学作品)の分野と比較すると、鷹書ははなはだ不可解で疑わしい文献群に見えるかもしれないが、そのような見方は正しくない。鷹書は別段「マイナー」なものではなく、平安時代から近世に至るまで旺盛に作成、書写され、日本書物史の一角を形作ってきた文献群である。いまだ生成・流動の跡を残したまま伝存するため、写本時代における書物の本来のありかたを示しているに過ぎない。今後の研究の深化が俟たれるところである。

最後になったが、文献の閲覧・調査・複写等をお許しいただいた、富山市立図書館(山田孝雄文庫)、国立公文書館にお礼申し上げる。また本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号2452047「放鷹文化と鷹書類の研究」研究代表者・中本大(立命館大学)による研究成果の一部であることを付記する。